

Daily Report (号外)

～FOMCの結果について～

概要

米連邦準備制度理事会(FRB)は、7月26-27日の米連邦公開市場委員会(FOMC)において、フェデラルファンド金利(FF金利)の誘導目標を1.50-1.75%から2.25-2.50%へと、前会合に続き0.75%引き上げることを見事決定しました。

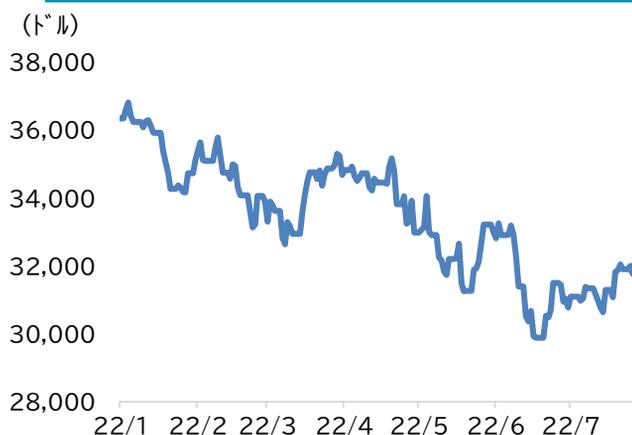
声明文では冒頭に「最近の支出および生産に関する指標は軟化した」との文言が追加され、前回の「全般的な経済活動は1-3月期に切り下がった後に加速したようだ」から景気見通しが下方修正された一方で、雇用に関しては「堅調」との判断が維持されました。物価については、前回は「エネルギー」価格の上昇に関して言及されていましたが、新たに「食品」価格の上昇に関する記載も加わりました。リスク要因に関しては、引続きロシア・ウクライナ情勢に言及する一方、「中国のロックダウン(都市封鎖)に伴う供給制約の増幅リスク」の文言は削除されました。

パウエル議長は記者会見で、「利上げのペースはデータ次第」との姿勢を維持すると同時に、「いずれ利上げペースを落とすのが適切になる可能性が高い」と述べました。質疑応答では、景気後退懸念への質問が相次ぎましたが、「現時点で米国が景気後退に陥っているとは考えていない」と答えるとともに、「ソフトランディングは失業率が大幅に上昇しないことを意味する」と、雇用増加を重視する姿勢を示しました。なお、今回の決定は全会一致であり、前回50bp利上げを求めたジョージ・カンザスシティ連銀総裁も75bp利上げの支持に回ったほか、新たに加わったバー副議長、コリンズ・ボストン連銀総裁も賛成票を投じました。

市場の反応

FOMC後の金融市場は、市場予想通りの結果だったことから、NYダウは前日比436.05ドル高の32,197.59ドル、米国10年国債利回りは前日より2.2bp低い2.78%で終わりました。パウエル議長が今後の利上げペースを緩める可能性に言及したことから債券買いが優勢となりました。外国為替市場では、米国国債利回りの低下などから小幅なドル安となり、ドルは136円台後半から136円台半ばまで下落しました。

NYダウの推移



米10年国債利回りの推移



(期間)2022/1/1~2022/7/27、(出所)Bloomberg

運用実績等は過去のものであり、将来の運用成果等を約束するものではありません。

また、シミュレーション等(前提は資料参照)については結果を確約するものではありません。

評価及び今後の見通し

今回のFOMCは、2会合連続の0.75ポイントの大幅利上げとなりましたが、概ね事前の予想通りの内容であり、市場の混乱を避けて無難に通過することができました。一方で、FRBの金融政策はデータ次第との姿勢が改めて示され、インフレと景気の動向を見極めるために、市場の注目は引き続き経済指標に集まると考えられます。また、8月には主要国の金融当局トップが集結する国際経済シンポジウム「ジャクソンホール会議」が開催されます。過去には同会議で金融政策の方向性が示唆されたこともあるため、FRBの今後の政策が示される可能性があり、注意が必要です。

(ご参考)今後の主要イベント

日程	イベント
7/28	4-6月の米国GDP(国内総生産)速報値
8/25~8/27	ジャクソンホール会議
9/20~9/21	米連邦公開市場委員会(FOMC)